

真慈悲寺推定地出土の中世瓦

平成元年（1989）に京王百草園内で出土した 5,500 点弱の瓦片の内、特徴的な 39 点と、園内から表面採集された完形に近い瓦 3 点の合計 42 点の瓦が「真慈悲寺推定地出土の中世瓦」として日野市有形文化財（考古資料）に指定されています。

出土した瓦は、大きく分けて二群にまとめられます。一つ目のグループは瓦当部（軒先の文様のある部分）に圏線（円弧状に一周する線）のない「左三巴文軒丸瓦」と「連珠文軒平瓦」がセットとなるもの。この群の軒平瓦は「顎貼付け技法」を用いて成形されており、13 世紀中頃と想定されます。もう一つの群は圏線のある「右三巴文軒丸瓦」と「蓮華唐草文軒平瓦」がセットとなるもの。この群の軒平瓦は「瓦当貼付け技法」により成形されており、13 世紀後半のものと考えられています。出土瓦の組成を検討すると、13 世紀後半の瓦は本瓦葺き（総瓦葺き）の屋根に葺かれたものと判断されます。

本瓦葺きの屋根に葺かれた中世の瓦が大量に出土しているのは東京都内でも類例がありません。京王百草園隣の百草八幡神社に伝えられている銅造の阿彌陀如来坐像（国指定重要文化財）の背銘には「建長二年」（1250 年）という年号とともに「日本武州多西吉富真慈悲寺」と刻まれています。この「真慈悲寺」という寺院については、『吾妻鏡』の文治二年（1186）二月三日条と建久三年（1192）五月八日条に記載があり、格式高い大寺院であったことがわかります。大量に出土した瓦は、この真慈悲寺がこの地にあったことを特定する根拠となり得るもので重要です。

軒平瓦にみられる「蓮華唐草文」は、この時期の都内では出土例がなく、13 世紀後半に鎌倉幕府の寺社造営に活躍した僧・忍性に関する瓦との関連性が注目され、当時の造瓦及び寺院の造営集団の技術的系譜を考える上で貴重な資料です。

以上のように、これらの瓦は中世の百草地域ならびに日野市域一帯の宗教的状況を考える上で、また鎌倉幕府との関係性を検証する上で極めて重要であることから、文化財に指定されました。（平成 23 年 8 月 17 日指定）

文献

日野市遺跡調査会編 『京王百草園の発掘調査』京王帝都電鉄株式会社発行 1993年

日野市郷土資料館編 『武州多西吉富真慈悲寺推定地出土の中世瓦』日野市郷土資料館 2013年

※『武州多西吉富真慈悲寺推定地出土の中世瓦』のPDF版は日野市郷土資料館のホームページで閲覧・ダウンロードできます。



軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦（13世紀中頃）

十三世紀中頃	 連珠文軒平瓦（順貼付け技法）	 圈線なし軒丸瓦
十三世紀後半	 蓮華唐草文軒平瓦（瓦当貼付け技法）	 圈線あり軒丸瓦

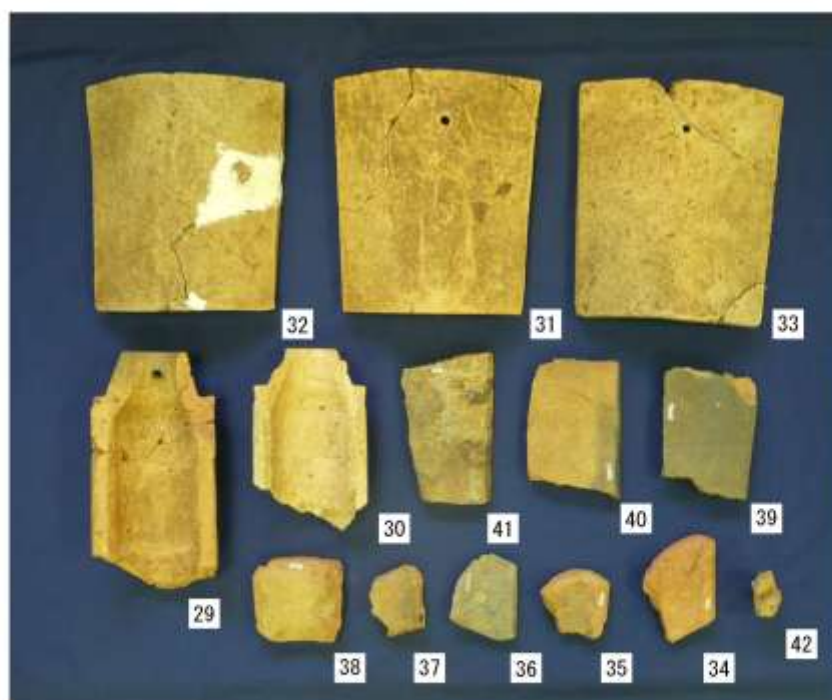
京王百草園出土軒瓦

写真掲載資料

1 及び 2 : 軒丸瓦 3～9 : 軒平瓦 10～14 : 丸瓦 15～16 : 平瓦



軒丸瓦・軒平瓦 (13世紀後半)

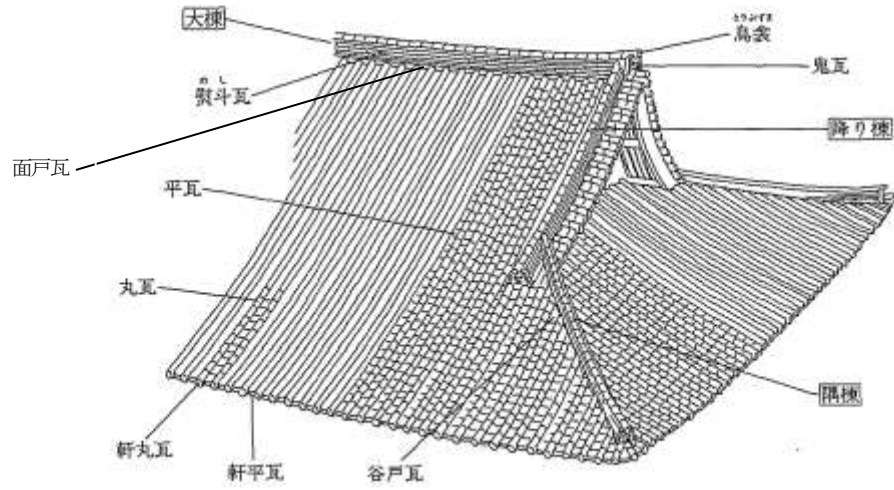


丸瓦・平瓦・面戸瓦・熨斗瓦・鬼瓦 (13世紀後半)

写真掲載資料

17～21：軒丸瓦 22～28：軒平瓦 29及び30：丸瓦 31～33：平瓦
34～37：谷戸瓦 38：面戸瓦 39～41：熨斗瓦 42：鬼瓦

瓦の名称



(『京王百草園の発掘調査』掲載の図に追記)